

近代への祈り

—吉満義彦における超克論を中心として—

保泉空（東北大学院）

【要旨】

日本近代史において、「暴走する近代」としての特徴が最も色濃く社会に現れたのは、アジア・太平洋戦争期であった。そのような社会では学問もまた、戦時体制に組み込まれ1つの歯車となる。しかし学問によって近代社会の暴走に歯止めをかけることの可能性もまた指摘できる。本稿では吉満義彦（1904～1945）に焦点を当て、「暴走する近代」社会を人間がいかにして乗り越え得るか、その可能性について検討する。吉満は中世宗教哲学の研究から、近代社会を信仰と人間性が失われた時代と捉え、その超克として新たな信仰の可能性を追求した。またカトリックのキリスト者として、自らの置かれた社会に誠実に向き合いながら人間と自然と神への畏敬の念を持っていた。本稿では、「暴走する近代」に対して吉満が、いかなる近代の超克を提起していたのかを検討するものである。

1、はじめに

本稿は日本のキリスト教カトリック思想家吉満義彦（1904～1945）¹の戦時期における言説に注目し、とりわけ彼の「近代の超克」論を分析し論じたものである。「近代の超克」という言葉は、同時代におけるアジア・太平洋戦争の遂行目的となるスローガンとして機能し、多くの戦争中の知識人を捉えた流行語であった²。敗戦後、「近代の超克」は知識人の戦争協力として厳しい批判の対象とされていたが、竹内好は「近代の超克」を日本近代のアポリアの凝縮であったと捉え、その当時において「近代の超克」という思想が何を課題とし、どのような解決策を提示しようとしていたのか、に注目する必要性を示した³。竹内以後の研究では、この時代において流行した「近代の超克」という思想そのものの内実を捉えようとしてきたといえよう⁴。

「近代の超克」の言葉自体は、『文学界』1942（昭和17）年9,10月号に掲載された、座談会「文化総合会議シンポジウム—近代の超克」⁵（以下座談会）に端を発している。吉満義彦の近代の超克論に注目するのは、彼自身がこの座談会に出席し、多くの発言を残しているからである。しかし、吉満の言説は、「近代の超克」研究の中では半ば無視されている観がある⁶。そこで本稿では、「近代の超克」座談会における吉満義彦の言説に注目し、彼の思想の内実を検討することを試みたい。しかし、「近代の超克」という言葉の包括性、多義性によって、吉満の「近代の超克」論という問題設定は、そのまま「吉満の思想」論と言い換えられる程に漠然としたものになってしまう。そこで今回は、歴史認識という点に焦点を当て論じることにした。

2、吉満義彦の歴史認識

1930年代以降の思想界において、知識人は日本至上主義の思想に対抗する一つの思想潮流として世界主義的な「歴史精神」の主張を行った⁷。それは、現実の社会に戦争の影が侵食しつつある中で、過去を省みて、現在の課題を明らかにし、今後の未来を展望しようとする試みであった。「近代の超克」の思想は、このような歴史をめぐる思索と共に立ち現れてきたことが指摘されている⁸。こうした観点から、今回吉満の「近代の超克」論を考えるにあたり、まずは吉満の歴史認識に注目して、彼の座談会での発言及び投稿論文を中心に検討したいと思う。

まず、吉満は座談会で「僕は近代の超克という題目を与えられたときに、大体ヨーロッパの精神史全体をどう見るかといふ立場で書いた⁹」と発言しているように、西欧の精神史を主軸に据えて歴史を振り返ることで近代的精神の課題を明らかにし、そうした課題を抱える近代を超克する方途を論じようとした。それでは、吉満の歴史認識の特徴とは何かを示せば、それは近代を中世の延長線上として捉え、中世の連続の中に近代を見出そうとする点である。彼は「西欧近代の問題は其儘ヨーロッパ中世の精神課題である¹⁰」と明言しているが、なぜ彼は、中世と近代は連続性があり、同じ精神課題を担っていると考えるのか。以下の引用に注目されたい。

近代は中世の否定であると言はれ、又古代的自由自然人間性の再生などと言はれるが、ヨーロッパ的民族の文化的及び政治的思想的形成は、古代世界の民族的及び文化的没落の荒廃の後に、新しくヘーゲルの所謂「キリスト教的ゲルマン的世界」の形成過程として営まれたもので、今日の西欧人間及び文化は古代から中世世界に移つた如きとは異つ

て、中世と同一民族の文化・社会的伝統を担っているものである。¹¹

吉満は、引用冒頭において近代を中世の否定、古代的人間の再生とする解釈に反駁し、中世の連続として近代を解釈する歴史認識を論じている。そして、その主張が成立するための論拠としてヘーゲルの「キリスト教的ゲルマン的世界」の説明を行った。ヘーゲルの『歴史哲学講義』において「中世と近代とは歴史哲学的考察のもとに同一精神史的範疇の過程¹²」であると論じられていることに吉満は注目し¹³、中世から近代にかけて社会、文化を担う伝統はキリスト教とゲルマン人に由来している点において、中世と近代の連続性を見出しているのである。つまり、ヨーロッパ社会においてゲルマン民族は中世から近代に至るまで同一民族を形成してきたと吉満は考えており、さらにその文化、伝統は、キリスト教によって担われてきた点を重要視して、中世と近代の連続性の論拠を、民族、宗教の連続性という点に見出していると言える。それでは、近代に至るまで解決を見ないヨーロッパ中世の精神課題とはいかなるものであるか。そして、中世の連続として規定される近代、あるいは近代的精神の性格とはどのように規定できるのか。

而してこのキリスト教的ゲルマン的世界といふものが、古き民族性の社会倫理性と、新しきキリスト教的宗教性と、このキリスト教の教育的使命遂行と共に、これに依つて媒介された古典的ヒューマンイズムの知性的文化と、つまりこの政治と宗教と文化との三要素の相互交渉の関聯によって規定されるので、手短かに言って了へば、中世世界は少く共カール大帝以来公的面において（キリスト教会と国家的政治秩序との絶えざる緊張関係にも拘らず、否な正にこの緊張関係が一つの理想的統一志向の故に）此等三要素の普遍的統一性の原理及び現実が保たれ努力された世界であり、近代世界はその統一の原理と現実とが失はれて、尚ほその相互関係が夫々の自律的支配の志向において継続されつゝ、常に悲劇的対立を自らに孕んで苦しんでゐる世界であると言へよう。¹⁴

上記引用から窺えるように、まず吉満の規定する中世精神史の根本的理念とは、「キリスト教的宗教性」、「古典的ヒューマンイズムの知性的文化」、「古き民族性の社会倫理性」、つまり宗教と文化と政治との相互関連性にあり、そしてヨーロッパ中世とは、この三者の「普遍的統一性の原理及び現実が保たれ努力された世界」であつたとされる。しかし、時代が下るにつれて、宗教、文化、政治の三者がそれぞれにおいて自律を主張し、統一志向性が崩れていく過程において近代の課題が生じてきたと吉満は考えている。つまり、彼の捉えた近代の精神的性格とは、政治・文化・宗教における統一性の崩壊と自律志向性であり、

それが近代の課題あるいは悲劇として論じられている。こうした近代観は彼の中世から近代の連続性という歴史認識によって密接に結び付けられているのである。

一方で、中世と近代の連続を主張する吉満の歴史認識において、古代と中世との関係はいかに規定されるか。吉満は古代と中世においては、その区別が明確になされることを主張する。そして、その明確な区分となるのが中世における「キリスト教的精神支配」であると考えていた。吉満にとって、古典人間とは「救ひを求めて病める、而して宿命的限界の前に祈る宗教的人間である」とされ、そのような古典人間の態度は、反動的な信仰態度であり、中世において目指された政治、宗教、文化の統一よりも、絶対的反動的な信仰の態度が存在していたことを指摘し、中世以後の「キリスト教的精神支配」が、古代と中世の明確な転換点として主張される。こうした主張において、吉満は中世における「キリスト教的精神支配」という経験を極めて重要と考えているが、それはキリスト教を吉満がどのように捉えているのかを併せて考える必要がある。

とに角ヨーロッパ世界は中世と近代を通じて同一民族形成を通じて、キリスト教的宗教実存性の真理と、ヒューマニスティックなロゴス文化との統一と分裂との絶えざる課題を負へるものとして、世界精神史上独特なものであるが、それは正にキリスト教が超自然的実在のロゴスの霊性の真理として全く新き恩寵啓示である所よりして、超文化、超民族性の絶対性格を担ふと同時に、それが宗教的実在の生命真理である正にその故に一切の民族生命の最内面的倫理生命可能性につながり、一切文化の創造的魂とならんとする、一つの超自然的靈魂共同体の形成真理なる所に由来してゐるのである。¹⁵

吉満は西欧中世におけるキリスト教の経験が、「超文化、超民族の絶対性格」を持っており、それゆえにキリスト教は現代においてもあらゆる民族の最も根本的で普遍的となる倫理として機能しうる可能性を有し、そして「自然的靈魂共同体」を形成することが可能である、という主張へと展開されている。

ところで、こうした吉満の議論は座談会の中で、他の参加者からどのように受け止められたのか。結論から述べれば、吉満の発言は、他の参加者からの共感を得られず、全体の中で極めて異質な意見として受け止められている。今回の歴史認識という論点において、最も大きく吉満と対立する発言を行った哲学者の西谷啓治（1900-1990）は、吉満の中世と近代の連続性という発言に対して、「中世と近代といふものは、非常に深い根本的な非連続¹⁶」という、中世と近代の断絶を主張した。西谷は中世を「神というものを中心に全て

が統一されてゐた」社会と捉えており、現代においても、そうした統一のために神を見出す必要性を認めながら、一方でそれは「中世人が求めたと同じ仕方では求められない」と主張する¹⁷。中世のような統一の原理の必要性において、吉満の議論と似たような点が認められるものの、それを実際に行う方法論において、吉満との考えを大きく異にする発言が見受けられる。このような、吉満の議論とその他参加者の議論との比較検討を行い、思想上の位置関係を把握する作業は今後の課題としたい。

3、おわりに

以上見てきたようにこれまで、吉満義彦の「近代の超克」論における歴史認識とは、中世と近代の連続性であり、それは西欧世界が中世から近代を通じてゲルマン民族とキリスト教という同一民族、宗教にあつて社会が形成されていることを論拠としていた。それゆえに、キリスト教的精神は、あらゆる民族の最も根本的で普遍的な倫理としての可能性を持ち、それに基づいた共同体の形成が期待されうるという展望を提示して見せた。これが、吉満の歴史認識に基づく近代の超克論の内実である。

本稿では、吉満義彦という日本思想史の文脈の中で論じられることが極めて少なく、「近代の超克」研究の中でも無視される状況にある人物の思想を丁寧に取り上げながら、その思想を明らかにすることを試みた。しかし、彼の思想を、同時代の多くの思想家たちの中で比較検討してみたときに、いかなる位置を占めるのかについては今後に残る課題である。またアジア・太平洋戦争期における吉満以外のキリスト教信仰者の思想の検討も重要であると考え、今後の吉満義彦研究の課題として取り組んでいきたい。

<付記>

吉満義彦略歴¹⁸

吉満義彦は1904年（明治37年）10月13日、鹿児島県の徳之島に生まれた。父義志信は同県の官選村長であった。鹿児島県立第一中学校2年のときに父を失い、この頃からプロテスタント教会へ行く。1922年、第一高等学校文科丙類に入学。一高ではキリスト教青年会、弁論部で活躍すると共に、学校では岩元禎の哲学講義に熱中する一方、内村鑑三の聖書研究会に加わる。1925年、東京帝国大学文学部倫理学科に入学し、この間、岩下壮一神父の影響もあり、カトリックへの決定的回心を体験し、1927年（昭和2年）受洗。1928年に大学を卒業後、岩下の推薦によってフランスへ渡り、パリ・カトリック学院のジャッ

ク・マリタンに師事。帰国して1931（昭和6）年より文筆活動を開始する一方、上智大学および、東京公教神学校にて哲学を講ず。1935（昭和10）年4月より、和辻哲郎の勧めによって東大文学部倫理学科講師兼任。1940年岩下壯一の死後、カトリックを代表する論者となった。1942（昭和17）年10月号の『文学界』に掲載された「文化綜合会議シンポジウム-近代の超克」にも参加し、一般の思想界の中でもカトリックの立場から精力的な発言を行った。1944年以降は体調悪化のため文筆活動が中止され、1945（昭和20）年10月23日両肺結核の一層の悪化によって逝去した。享年41歳。

注

- 1 吉満義彦の経歴については、末尾の付記を参照されたい。
- 2 竹内好「近代の超克」（河上徹太郎他著『近代の超克』富山房、1979年）274頁
- 3 同上、338頁
- 4 廣松渉『＜近代の超克＞論—昭和思想史への一視角』（講談社、1989年）、子安宣邦『「近代の超克」とは何か』（青土社、2008年）、菅原潤『近代の超克再考』（晃洋書房、2011年）、鈴木貞美『近代の超克—その戦前・戦中・戦後』（作品社、2015年）など。海外の研究には Harry Harootunian. *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*. Princeton University Press, 2000. Richard Calichman. *Overcoming Modernity: Cultural Identity in Wartime Japan*. Columbia University Press, 2008.などが挙げられる。
- 5 この座談会には亀井勝一郎、西谷啓治、下村寅太郎、吉満義彦、津村秀夫、鈴木成高、三好達治、林房雄、菊池正士、中村光夫、河上徹太郎、諸井三郎、小林秀雄の知識人13名が参加し、1942（昭和17）年9、10月号の『文学界』に「近代の超克」をテーマとした論文が掲載された。
- 6 吉満義彦に焦点を当てた研究に目を向けたとき、初めて思想史研究として吉満を論じた半澤孝麿『近代日本のカトリシズム』（みすず書房、1993年）、その後の若松英輔『吉満義彦』（岩波書店、2014年）が挙げられる。両著作共に、吉満がカトリックの信仰者である点に注目し、その観点を重点的に取り上げた思想研究を行っている。一方で広く同時代の思想界の文脈に照らして、吉満の思想家として側面を描いた研究は未だなく、必要な作業であると考え。また村松晋『近代日本精神史の位相』（聖学院大学出版会、2014年）で

も吉満義彦が考察の対象とされているが、近代の超克座談会と吉満を関連付けて考察した研究はない。

7 吉田光「第二次大戦下の思想的状況」（遠山茂樹編『近代日本思想史』、第3巻、第13章、青木書店）713頁

8 同上、714、715頁

9 「文化総合会議シンポジウム—近代の超克」座談会（『文学界』1942（昭和17）年9、10月号）（引用：河上徹太郎他著『近代の超克』富山房、1979年）180頁（以下、座談会と記す）

10 吉満義彦「近代超克の神学的根拠—如何にして近代人は神を見出すか—」（1942年）（河上徹太郎他著『近代の超克』富山房、1979年、68～69頁）（以下吉満論文と表記）

11 吉満論文 68頁

12 吉満義彦「中世精神史の理念」（1940年）（『吉満義彦全集第二巻』5頁）

13 上記「中世精神史の理念」文献内において吉満は、ヘーゲル以外にも、西洋の最新の学者の歴史哲学の議論では、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』、ディルタイの『精神科学序説』がヘーゲルの『歴史哲学講義』同様に中世と近代を同一範疇で論じること注目している。

14 吉満論文 69頁

15 吉満論文 70～71頁

16 座談会 184頁

17 座談会 184～185頁

18 若松英輔『吉満義彦』（岩波書店、2014年）の年譜を基に作成。